

Duet

2025 秋 vol.154

滋賀の文化情報誌

デュエット

特集

中江藤樹・たかしまミュージアム オープン!

蔵書数約1万5000冊!

自費出版ライブラリー「考耕行」オープン

「日本自費出版文化賞」応募作品が一堂に

INFORMATION STATION 催し案内 2025 秋

MYBOOK 自費出版物の紹介

SUNRISE BOOK PRESS サンライズ出版の新刊案内

中江藤樹・たかしまミュージアム オープン!

高島市安曇川町上小川にある中江藤樹記念館が改修され、今年6月1日に「中江藤樹・たかしまミュージアム」としてオープンしました。高島市内(旧5町1村)の文化財全般を展示する新たなミュージアムについて、山本晃子館長と早川貴子学芸員にお聞きしました。

柱などのフジ色は、自宅にフジの老木があった藤樹の名にちなむ



上：マキノ資料館
左上：朽木資料館
左：高島歴史民俗資料館
(3点とも高島市提供)
3館とも令和6年(2024)
3月31日をもって閉館



中江藤樹・たかしまミュージアム

住 所 高島市安曇川町上小川69

連絡先 TEL・FAX 0740(32)0330

休 館 日 月曜日(祝日・振替休日の場合は開館し、翌平日が休館)、
12月29日から1月3日まで

入 館 料 一般(高校生以上)300円、小・中学生および未就学児無料

駐 車 場 無料(台数限りあり)

アクセス JR 湖西線「安曇川駅」より徒歩18分／高島市コミュニティバス船木線「藤樹記念館前」下車すぐ

取材／編集部 写真／辻村耕司



これまで埋もれていた文化財の再発見や 初公開の場になればと思っています。

旧町村の4つの資料館を1か所に集約

—6月に開館した中江藤樹・たかしまミュージアムについて、まず開館までの経緯をお話いただけますか。

早川 もともとは、安曇川町が昭和63年（1988）に開館した中江藤樹記念館がありました。中江藤樹の遺品など、主に藤樹書院の所蔵品を中心にお預かりして、藤樹の教えなどをお伝えする施設でした。山本 平成17年（2005）に高島郡の5町1村が合併しましたが、そのうち4町村に、歴史系の展示施設がありました。高島歴史民俗資料館、朽木資料館、マキノ資料館、そして安曇川町の中江藤樹記念館です。

今回、その4館の機能を1か所に集約してできたのが、このミュージアムということになります。

合併した自治体ではよく起こりがちなことなのですが、旧町単位の資料館はスペース的に小さく、それぞれの館が離れていて交通の便もあまりよくなく、高島市にお越しになった方が周遊するのも難しい状態でした。それらを1か所に集約する場合、観光面でも、すぐそばに道の駅「藤樹の里あどがわ」がある藤樹記念館がベストだろうということになりました。

—そこは高島歴史民俗資料館に集約する形になるだろうと思っていたので、少し意外でした。

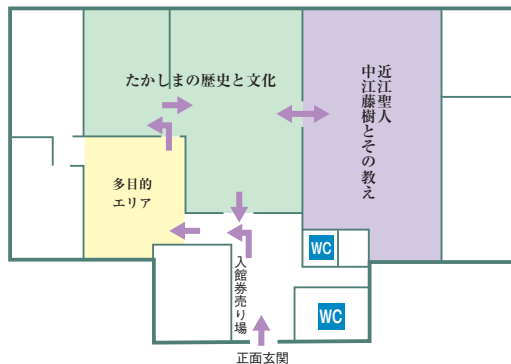
山本 合併した高島市では、このあたりが地理的にも中央部に近く、各種文化施設が集まっています。なおかつ、市外からお越しいただく方にもアクセスしやすい場所だということで選ばせていただきました。

—早川さんは、どの段階から関わっていたのですか。

早川 私はもともと中江藤樹記念館の職員として勤務していました。今回旧施設閉館の準備から新施設のオープンまで幅広い範囲で関わらせていただきました。

—計画どおりに進みましたか。

山本 ほぼ計画どおり進みました。展示スペースを少しでも広くするために、



↑中江藤樹・たかしまミュージアムの平面図

もともと講義室と図書室だった部分を改築し、展示室を拡大させています。同時に段差などをなくすバリアフリー化、照明のLED化も行いました。

早川 以前は右側の部屋と入口正面奥の部屋の2部屋だけが展示室で、左側は図書室、少し広めの講義室でした。

※1 中江藤樹（1608～1648）江戸時代初期の儒学者。近江国高島郡小川村に生まれる。日本陽明学派の祖とされ、「近江聖人」と呼ばれた。

※2 藤樹書院 中江藤樹が小川村に開いた私塾。門人たちが建てた初代は明治時代に小川村の大火で焼失。再建された現在のものが国の史跡に指定されている。



中江藤樹・たかしまミュージアム
学芸員

早川貴子さん

はやかわ・たかこ／1976年、滋賀県生まれ。



中江藤樹・たかしまミュージアム
館長

山本晃子さん

やまもと・あきこ／1970年、滋賀県生まれ。高島市教育委員会文化財課長と兼務。

広さにゆとりがあった講義室をさらに分割することで、団体でも対応できる広さの多目的エリアと調査に必要な作業室を確保できました。

——閉館した3館にあった考古学系の資料や民具などは、どうなったのですか。

早川 旧マキノ資料館が収蔵スペースとなりました。展示室だったところ全部に棚を

大騒動だった資料の引っ越し

——収蔵品の移動は、いつごろの作業だったのですか。

早川 令和6年（2024）4月1日からです。まず中江藤樹記念館にあったモノをいったんすべて運び出すことから始まりました。資料を一つずつ梱包し、備品なども含めて何もかもを搬出して、からっぽにしました。

中江藤樹記念館の図書室には関連図書が1万冊以上あり、それをひもで結わえるところから始め、移動はまさに人海戦術でした。本の仮置き場はエレベーターがない場所だったので、階段を皆で「わっしょい、わっしょい」という感じで、あれで4kgぐらい痩せました。

山本 それは申し訳ない。

早川 すぐ戻りましたが、その時期は、みんな筋肉がついて体がシュツとしていました（笑）。

山本 それから、先に改修しておいたマキノ資料館へ、高島歴史民俗資料館のものを移し、朽木資料館のものを移し……。

早川 当然大きな物もたくさんあるので、専門の業者さんにも来ていただいで。

山本 一時的に一部を他施設の空いている部屋などに置かせてもらったこともありましたね。「これはどうしましょうか」「これは、こっちのスペースに置いて」といった、

設置して、多くの資料を収蔵できるようにしています。

山本 実質的には、4館を2館にした感じです。旧マキノ資料館を収蔵庫として、展示機能を当館へ集約しています。

その作業が大騒動でしたけどね（笑）。

早川 いろんなことがありましたね。

やりとりをくり返して。

早川 よかったのは、しっかり資料などの整理整頓ができたことですね。

——昨年度は大変だったのですね。6月からの開館で、それまでの中江藤樹記念館だった時代からの変化はありますか。

早川 そうですね、来館者の層は確実に変わっていて、以前は高島歴史民俗資料館にいられていた埋蔵文化財関係や歴史関係のファンも、こちらにきていただけるようになりました。

山本 旧マキノ町や旧今津町の遺跡からの出土品はあまり展示ができていなかったのですが、今回久しぶりにお目見えしたのもあります。

早川 今回、作業の中で実際に一つひとつ眼にして、「ああ、こんなものがあったんだ」と、再発見のような面もありました。

山本 とはいえ、収蔵品全部が展示できるわけではないので、定期的に展示替えするなかで、そうしたものをどんどんお見せしていければと思っています。

——市内の資料を公開する館として、非常にいい施設ができたということですね。

山本 開館告知チラシのキャッチフレーズを「たかしまの歴史がすべてがわかるミュージアム」とさせていただいたとおり、本当に発信などもしやすくなりました。

特に私は市の文化財課にいましたので、市役所にお問い合わせの電話があったときに、「それはマキノにあるんですよ」、「それは高島に来ていただいて」、「それは中江藤樹記念館なんです」みたいにバラバラのお答えになっていたのですが、ようやくすべてのお問い合わせに、まず当館へ問い合わせして来館していただくとうわかりますとお答えできるようになりました。まさに文化財情報の拠点施設ができたと思っています。

早川 外部から調査にいられた方も、まずは当館に来ていただいて準備をしていたので、効率もとてもよくなりましたね。

山本 本当にいままではウロウロしていたんです。職員も分散していたので、それが一か所に集まったメリットも大きいです。

早川 私もいままでは藤樹のことに特化していたのですが、市内全体のことを満遍なく学べる機会をいただけたことで、市内の地域間での知らなかったつながりを発見できたりしています。

——そうすると、市内の小学校の見学などもやりやすくなったでしょうね。

早川 それもあります。マキノ資料館と朽木資料館は事前予約をいただいた時のみ開館していましたが、その都度館へ行つて鍵を開けて、いろいろ準備して大変でした。

山本 計画当初は、それぞれの地元の方から「資料館がなくなるのは寂しい」というお声ももちろんいただいたのですが、市民の多くは自動車で移動をされますし、ここに行けば安心ですという場所ができたことは大変よかったと思っています。

早川 来館者の感想としても、幅広いジャンルのものを見ることができたので、新たな発見があったという方が多くいらっしやいますね。

——今回の統合を機に、資料の再整理ができたという部分もあるわけですか。

早川 それはとてもあります。

山本 埋もれた資料があつてはいけないのですが、やっぱり合併前の期間も長かったですから。

早川 現在高島市内にはこれぐらいの規模の文化財があるんだというのが、共通認識できるようにしたのはよかったなと思っています。

山本 資料整理は令和2年度に作成した「高島市文化財保存活用地域計画」に基づいて進めました。

早川 コロナ禍で閉館していた時期に、資料整理を進めていたのが、功を奏したという実感があります。

山本 地域計画では、1館へ統合のような具体的な計画は決まっていなかったのですが、合併して15年ぐらいいつていきましたので、各館の資料整理は必要であると考えていました。それが一定程度できたので、集約に踏み切れたというのがあります。

——合併した市では、合併前に町立として誕生した施設の今後が課題になっているところもあります。その点、高島市はうまくいったという感じでしょうか。

山本 それぞれの市で計画を立てておられると思いますが、課題が多いという話もよく聞きますので、少しでも参考にされる例になればと思います。

——展示の仕方、来館者への見せ方、伝え方もいろいろ変化していますが、そのあたりはいかがですか。

山本 時代に合ったものにするという意識を持って進めていたつもりですが、新しいものをつくらうとすると当然経費もかかります。館内全部でWi-Fiが利用できるようにして、どこでも説明を見られるとか、

藤樹先生の画像が話し出されるとか、特に子どもを対象にしたわかりやすい展示のためにやりたかったことはあるのですが……。

——予算およばずですね。

山本 ただ、事前に見学させていただいた館で、「そういう技術はほとんど変わるし、一度導入すれば維持経費もかかるので、もっと慎重にやった方がいいですよ」というアドバイスもいただきましたので。予算内で、紹介映像は3種類作成しました。

早川 映像の作成は、制作会社に発注したのですが、若手のスタッフが多かったもので、イメージを伝える段階からジェネレーションギャップがありました。藤樹の解説映像で、「藤樹のお母さんのイメージはど

今年度は「継体大王出生の地」をテーマに

——それでは続いて、館内の展示についてご説明いただけますか。

早川 高島の歴史と文化については、まず多目的エリアで、高島全体の歴史を網羅した15分の映像を見ていただけます。

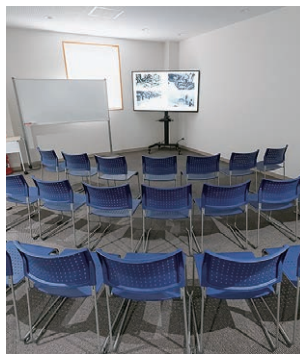
最初の展示室にあたる「たかしまの歴史と文化」では、令和7年度は「継体大王出生の地」がテーマの中心になっており、考古系の資料、遺跡からの出土品を中心に展示しています。

——その継体大王というのは、第26代継体天皇のことで、第25代武烈天皇に子がかつたため、北陸に住む地方豪族の身で天皇の位についた異色の存在として、古代史ファンにとっても人気があるそうですね。

山本 そうなんです。「近江国高島郡三尾

※3 メーテル 松本零士作・原作の漫画とアニメ『銀河鉄道999』などに登場するヒロイン。

※4 継体大王（？～531?）第26代天皇。名は男大迹。第15代応神天皇の5世孫（曾孫の孫）とされる。



↑紹介映像が上映される多目的エリア。他の催しなどにも利用することができる

んな感じですか」と言われたので、「じゃあ、メーテル^{※3}でお願いします」と言ったら「メーテルって何ですか」と言われて、びっくりしました（笑）。

——世代によって「わかる、わからない」は、あちこちで起こっていると思います。

（現、高島市安曇川町三尾里^{みおざと}付近）で生まれたとされ、付近には継体大王にまつわる遺跡や伝承が数多く残されています。

早川 展示の後半では、平安時代以降、戦国時代ぐらまでの文化財を紹介し、隣の展示室「近江聖人中江藤樹とその教え」で藤樹が活躍した江戸時代初期につながるようになっていきます。

山本 企画展、常設展という分け方はしておらず、現在の展示も常設展というわけではありません。来年度は大河ドラマ『豊臣兄弟!』の関係で「戦国時代の高島」がテーマとなり、織田信長の甥・信澄^{のぶみず}が築いた大溝城や「信長の朽木越え」などを紹介することになるだろうと思っています。

——展示を見ると、先ほどもおっしゃっていたように古代の出土品、土器や石器などがたくさん並んでいます。

山本 大きな甕^{かめ}は、今津町の北仰西海道遺跡から出土した土器棺で、縄文時代晩期の集合墓地で遺体を入れたものです。



↑北仰西海道遺跡出土の土器館
(縄文時代晩期、高島市教育委員会蔵)



↑上御殿遺跡出土の双環柄頭短剣銅型
(弥生時代～古墳時代、滋賀県蔵) [展示は10月26日まで]

こちらの区画の中央に置かれているのが、**双環柄頭短剣の銅型**ですね。

山本 平成25年(2013)に安曇川町の上御殿遺跡から滋賀県文化財保護協会による発掘調査で見つかったものです。国内で出土例のない大発見だったので、当時新聞の一面に大きく報じられましたね。

私もすぐく印象に残っています。

山本 柄の頭に二つの輪がある形は、中国北方地域で春秋戦国時代(紀元前8世紀～前3世紀)に騎馬民族が使っていた「オルドス式短剣」という剣の特徴だそうです。ただ、実際にこの銅型を短剣製造に使った形跡はなく、未使用のようです。

早川 計測すると、組み合わせたさいに少しずれているそうですね。

山本 それでも、少なくとも日本で作り出された型ではなく、高島は日本海側からさまざまな大陸のものが流入してきた地だったということは言えると思います。出土地は田んぼの中で、まだ周辺で圃場整備の事業は続いており、さらに発見があるかもと期待しています。

これは、高島市では初の展示になるのですか。

山本 そうです。所蔵する滋賀県からお借りしています。これまでは展示する場所がなくて、高島市で出土したのに市内で展示ができていなかったんです。近江八幡市にある滋賀県立安土城考古博物館では平成29年(2017)の秋季特別展で展示され、県指定文化財に指定されたあとの令和2年(2020)にも展示されていました。

ようやく地元にお迎えできる環境が整ったわけです。

続いて、古墳からの出土品になると、**直接、継体大王に関わってきます。**

早川 こちらにあるのが、継体大王の父・彦主人王の墓とされる田中王塚古墳を中心とした田中古墳群の36号墳から出てきた馬具類です。円形の二つは雲珠と呼ばれる金具ですが、見学した子どもたちが「かわい」と言っていました。新鮮な反応です。

仕切りを越えたスペースの中央が鴨稲荷山古墳の出土品関連ですね。この金びかの冠についている魚形の飾りもかなりかわいいと思います。

山本 鴨稲荷山古墳は6世紀の前方後円墳で、明治35年(1902)に発見され、大正12年(1923)に京都大学によって本

←鴨稲荷山古墳出土の金銅製冠(複製)
(高島市教育委員会蔵)

↓田中古墳群(36号墳)出土の馬具類
(古墳時代、高島市教育委員会蔵)



※5 彦主人王(生没年不詳) 近江国高島郡三尾を本拠とする豪族。第15代応神天皇の4世孫(玄孫)。越前から振媛を妻として迎え、生まれたのが継体大王とされる。

※6 雲珠 馬の尻に掛け渡した革製ベルトの結節点を固定するための金具。

格的な発掘調査が行われました。未盗掘だったので横穴式石室の中の家形石棺から大量の副葬品が発見されました。これらの副葬品は東京国立博物館や京都大学に収蔵され、その後の研究で朝鮮半島の王陵からの出土品との類似が指摘されています。継体大王とも近い在地の豪族・三尾氏に関連する人物が埋葬されたと考えられています。

きれいな宝冠や飾履のレプリカは、高島

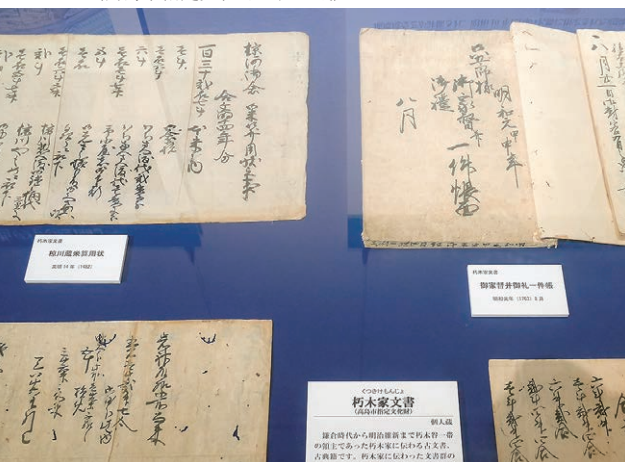


↑高島歴史民俗資料館から引き継いだ鵜川四十八体仏と鴨稻荷山古墳の家形石棺のレプリカ



↑椋川日吉・山神社の懸仏
(室町時代、高島市指定文化財、椋川区蔵)

↓「朽木家文書」
(高島市指定文化財、個人蔵)



歴史民俗資料館で展示していたものです。原寸大の石棺模型も、同館で展示していたのですが、今回リメイクをして、引き続き展示をしています。ふたを半分開けた見せ方などは展示業者の方と相談しながら決めました。

※8 体石仏のレプリカも置かれていますね。

山本 これも高島歴史民俗資料館にあったものです。大きな石造物は実物を持ってくるわけにもいかなないので、これはありがたいと思って使いました。

ここは、中世における「信仰」をテーマとしています。「大般若経」は市内にたくさん残っており、県指定文化財になっているものもあります（展示は県指定はふくみません）。600巻もあるので、特に旧朽木村地域では神社やお寺での保管が難しくなっており、朽木資料館に寄託を受ける場合が、多くなっていました。保管はされたものの、しまえばなしの状態だったのですが、今回、このように展示・公開することができ

ました。

隣の懸仏は、今津町の一番奥、福井県と接する椋川という集落の二つの神社から昭和60年（1985）と平成4年（1992）に見つかったものです。神仏習合を示す最終的なもので、神様が仏様の形をして現れた姿ですね。

明治の廃仏毀釈の時にしまわれたわけですが。

山本 そうだと思っています。廃仏毀釈を厳格に守ったところでは、ひとつ残らず焼いたり捨てられた例もあるのですが、「あかん」と言われているし、とりあえず奥にしまっておこうという感じだったのだと思います。2社あわせて252点あった懸仏は室町時代のものが大半ですが、一部、平安時代後期のももあります。

かなり小さいので簡略化されていて、これでもいいですよ。

その反対側のコーナーは、朽木氏についてです。

山本 鎌倉時代から江戸時代までずっと朽

木谷一帯の領主だった朽木家に残されていた「朽木家文書」は重要文化財に指定されていて、ほとんどは国立公文書館が所蔵しています。これは地元に残された朽木家に関係するものの一部です。

今回展示した中には、文明14年（1482）の「椋川蔵米算用状」などもあり、本当にこんな中世の文書がよく残されてきたなと思います。

- ※7 飾履 古代の王や有力者の葬送儀礼で使われた金銅製の装飾的な靴。死者を装う副葬品として古墳から出土する。本誌表紙の上段写真中央を参照。
- ※8 鵜川四十八体仏 高島市鵜川にある花崗岩製の阿彌陀如来像群。高さ1.6m。48体のうち13体が大津市坂本の慈眼堂に移され、2体は行方不明、現在は33体が残る。
- ※9 大般若経 「大般若波羅蜜多經」の通称。唐の玄奘が訳した大乘仏教の般若經典を集成したものだ。
- ※10 懸仏 銅などの円板に仏像を鋳たものをつくり、浮き彫りにしたりしたものだ。神社の堂内に懸けて礼拝した。鎌倉・室町時代に盛んに作られた。

門人への助力を惜しまなかつた教育者・藤樹

——そして、隣の部屋が「中江藤樹とその教え」の展示ですね。いま、中江藤樹の知名度は、どうなのでしょう。

早川 県外から藤樹を目指して来られる方が多いです。なかでも経営者やビジネスマンの方々は、京セラ会長だった稲盛和夫さんやパナソニックの創業者・松下幸之助さんの経営哲学が陽明学や藤樹の思想に通じるというので、経営倫理や社員教育・人間育成という方面から藤樹を知る方も多いようです。

また、大河ドラマ『青天を衝け』（2021年）の放映時には、渋沢栄一経由で藤樹を知る人もたくさんおられました。

——なるほど。では、展示資料をご紹介いただけますか。

早川 大洲（おおす）（愛媛県）から帰郷した藤樹が小川村で生計を立てるため、酒の小売りをしていた時に酒を入れていたとされる酒壺です。客を信頼して、いまでいう無人販売をしていました。

つぎは、藤樹が門人の大野了佐に宛てて書いた手紙です。

——多目的エリアの映像資料で拝見しました。勉強は得意でないけれど苦勞して医者になった人ですね。

早川 教育者としての藤樹を象徴するエピソードの一つです。了佐は藤樹の同僚藩士の息子で、小川村の藤樹を追いかけてまで学ぼうとした人物です。この手紙で藤樹は、『捷徑医筈』の新しいページができたことを告げています。藤樹は、誰もが志を持つて学問にはげむことができるよう、そのための助力を惜しみませんでした。

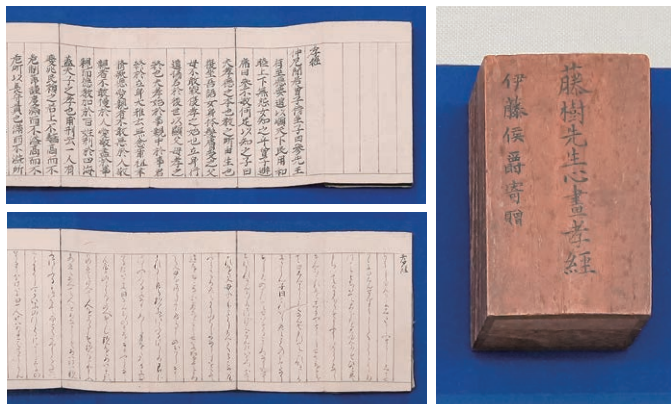
遠方の門人とは手紙のやりとりを中心に通信教育のような感じで、懇切丁寧にマン

ツーマンの指導をしていたようです。門人たちの勉強の助けになるよう、手づくりの辞書まで作っています。

——つくづくめな人だったのですね。教育者として非常にすぐれていたでしょう。

了佐が苦勞の末に医者になった時には、「私も精根尽くしたけれど、了佐本人の志が強かったからこそだよ」と、彼の努力を称えています。

こちらは、上下二つとも藤樹自筆の「孝経」ですが、上段の楷書体で書かれたものが「白文孝経」、下段の訓読文を仮名で書いたものが「かながき孝経」と呼ばれ、後者は妻・久のために書いたものと伝わっています。孝行の大切さを説いた「孝経」は、儒教經典の中で藤樹が最も重視したものです。最初の方にある「身体髪膚これを父母



↑「白文孝経」(上)、「かながき孝経」(下)と箱(右) (藤樹書院蔵)

※11 『捷徑医筈』 中江藤樹が大野了佐のために編集した医学入門書。藤樹死後の明暦元年（1655）に京都の出版社から木版刷で刊行された。「捷徑」は近道という意味。

※12 『孝経』 中国古代の孝道について孔子と曾子（そうし）が交わした問答を、曾子の門人が書き残したものとされる。

に受く、あえて毀傷せざるは孝の始めなり」（両親からももらった自分の体を大事にして怪我が病気をしないことが孝行の始めである）という言葉は、ご存じの方も多いのではないのでしょうか。

ちなみに、箱書きに「伊藤公爵寄贈」とあり、大洲の門人宅に伝来していたものを伊藤博文が入手して、藤樹書院に寄贈したと伝わっています。伊藤博文は吉田松陰の弟子ですので、松陰も感化された陽明学にも関心があったのかもしれませんが、藤樹は、明治になってから、また再評価が起こっていますね。

早川 最後にあたるコーナーでは、藤樹の亡くなった後、その教えがどのように広がり、伝えられ、現在の高島につながっていったのかを紹介しています。

——中江藤樹記念館の時代から、小学生向けの催しなども多かったと思いますが。

高島市では3月7日の藤樹の誕生日にあわせて「立志祭」という行事があり、市内の小学3年生が藤樹の学習をします。

毎年夏休みに開催している「了佐てらこや小学校」では、従来行ってきた「論語」の素読や習字のほか、今年は新たに勾玉づくりや火起こし体験なども加わり、催しの幅が広がりました。子ども向けのコンテンツも、もっと増やしていけたらいいなと思っています。

——本日はお忙しいところ興味深いお話をありがとうございました。

(2025.9.11)

蔵書数約1万5千冊！ 自費出版ライブラリー

「考耕行」オープン

「日本自費出版文化賞」（一般社団法人日本グラフィックサービス工業会が主催、NPO法人日本自費出版ネットワーク（JSN）主管）

は、平成9年（1997）に創設され、翌年（1998）に第1回の募集・選考・受賞作の発表が行われました。

以来、第28回目となる今年は9月1日に受賞作が発表され、大賞は該当作なしでしたが、竹内尚代著『私のことは私が決める』が色川大吉賞に、地域文化部門で『紙で残す私の1枚』刊行委員会編『紙で残す私の1枚』（須高郷土史研究会）、個人誌部門で菅原洋一著『手記「もやいの海」』（文芸社）などが各部門賞に選ばれています。

毎回1000冊程度の応募があり、当初からこれらの応募作品を私設の自費出版図書館や文化フォーラ

ム春日井（愛知県春日井市）などに寄贈し、公開展示が行われていました。

第15回以降は、応募作品が分散することを避けるためJSN会員社であるサンライズ出版（滋賀県彦根市）で保管することになり、年に数回、会員社の協力のもと各地で巡回展示を行っていましたが、一部の受賞作品を展示するにとどまっていた。

作品の中には入手困難なものも多く、継続的な保存と公開の場を探していたところ、小学校跡地の施設の有効活用を望む学校法人ヴォーリズ学園とのが縁があり、現「ヴォーリズみらいビレッジ」の管理者である有限会社ウエストの運営により同施設内に10月1日、自費出版ライブラリー「考耕行」がオープンしました。



自費出版ライブラリー「考耕行」

住所	近江八幡市浅小井町699（旧近江兄弟社小学校） ヴォーリズみらいビレッジ図書室
連絡先	携帯 090-1224-3246
開館時間	10：00～17：00
開館日	開館カレンダーに準ずる （Instagram @koukoku_books 参照）
入館料	無料（原則として予約が必要）
アクセス	無料駐車場あり／JR 近江八幡駅よりタクシー約10分／ JR 安土駅・近江八幡駅より近江八幡市民バスあかこん バス安土北・金田コース

books 考耕行
Instagram



ヴォーリズみらいビレッジ
令和5年（2023）3月に廃校となった小学校の跡地を、地域交流やスポーツ振興の場として活用している施設

『別冊淡海文庫 石塔寺と石造三重塔』 発刊記念

石塔寺石造三重塔・見学会

11月1日(土) 10:00～11:30

石造三重塔としては日本最大の石塔寺石造三重塔を中心に、同じく国の重要文化財に指定されている石造宝塔1基・石造五輪塔2基、江戸時代後期に設置された八十八ヶ所石仏など、周辺の石仏・石塔群を著者の解説付きで見学します。

講師：大塚活美氏（元京都学・歴史館学芸員）

見学地：石塔寺（東近江市石塔町860）

集合場所：石塔寺駐車場

料 金

淡海文化を育てる会 会員 500円（拝観料込み）

一般 1,000円（拝観料込み・資料代）

定員：20名（要予約、先着順）

お申し込み・お問い合わせ先

淡海文化を育てる会（サンライズ出版内）

TEL 0749 (22) 0627 FAX 0749 (23) 7720

Email: info@sunrise-pub.co.jp



これまでの考古学的調査で明らかとなった成果を集積し、近隣市の出土文化財、画像記録もあわせ、古代から中世にかけて野洲川下流域の村々がどのように変貌し現在の集落が構成されてきたかを紹介します。

入館料：大人300円、高大生150円、小中生100円
休館日：月曜日（祝日の場合は開館）、祝日の翌日

青磁輪花碗
（12～13世紀、五条遺跡）

■関連講演会

「野洲川下流域の発掘調査をふりかえる」

11月1日(土) 14:00～16:00

講師：大橋信弥氏（元滋賀県安土城考古博物館学芸課長）

「湖南地域の発掘調査50年」

11月9日(日) 14:00～16:00

講師：雨森智美氏（栗東市スポーツ・文化振興課）

畑本政美氏（守山市立埋蔵文化財センター）

渡邊貴洋（当館学芸員）

会場：当館1階研修室

参加料：無料（要入館料）

定員：120名（事前申込不要・当日受付）

■遺跡見学会

11月3日(月・祝) 10:00～12:30

集合場所：当館1階研修室

定員：20名程度（事前申込不要）

参加費：無料（要入館料）

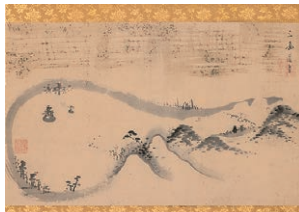
お問い合わせ先：TEL 077 (587) 4410

秋季特別展

近江の名所

開催中～12月14日(日)

MIHO MUSEUM

「琵琶湖近江八景図」
池大雅画（江戸時代
世紀 個人蔵）
18

近江には万葉集以来、歌に詠まれる名所があります。近世、近衛信尹が膳所城から

第98回企画展

れきはくの大津絵

開催中～11月9日(日)

大津市歴史博物館

江戸時代、大津町の追分や大谷で街道の土産物として描かれていた大津絵。

開館以来収集を続けてきた当館の大津絵関係の収蔵品約150件を一堂に展示し、350年余りにわたって、仏画からユニークな近現代の大津絵キャラクターへと移り替わったさまざまな大津絵を紹介します。

入館料：一般800円、高大生400円、小中生200円
休館日：月曜日（祝日の場合は開館し、翌平日休館）、祝日の翌日

■記念講演会・れきはく講座

各回14:00～15:30

「大津絵と信仰」11月1日(土)

講師：クリストフ・マルケ氏（フランス国立極東学院京都支部長・教授）

「アメリカの美術館における大津絵」

11月8日(土)

講師：鈴木堅弘氏（京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター特別研究員）

会場：当館1階講堂

参加費：500円

定員：100名（事前申込が必要）

申込方法：当館HPの「講座・講演会情報」ページをご覧ください。

お問い合わせ先：TEL 077 (521) 2100

秋期企画展

野洲川下流域の暮らしの変貌

—発掘調査にみる古代・中世—

開催中～11月24日(月・祝)

野洲市歴史民俗博物館（銅鐸博物館）

野洲市は野洲川下流による広大な沖積地を有し、弥生時代以来稲作農耕を基盤として発展を遂げてきました。

「鬼念仏藤娘図」 温山良隠（江戸時代 本館蔵）



滋賀まるごと読書フェア



主催：滋賀県教育委員会



「滋賀まるごと読書フェア」は、滋賀の子どもたちが読書に親しめるように、滋賀県の図書館や書店と一緒に行うイベントです。

11/15(土)

文学のまち大津 湖都の葉マルシェ

大津湖岸なぎさ公園おまつり広場・
修景緑地(雨天：旧大津公会堂)等

「文学のまち大津」をテーマに初めて開催される湖都の葉マルシェでは、出版相談会や滋賀本の展示・販売、「滋賀コレかるた」のかけっこかるたを行います。

主催：おおつ文学のイベント実行委員会

11/8(土)

きのもと秋のほんまつり2025 「本の入り口、届けます!」

木之本スティックホール

・ブックフェア 10:00～16:00

・トークショー 10:30～11:30

講師：西靖氏(毎日放送アナウンサー)

・講演会 13:30～15:00

講師：伊藤比呂美氏(詩人)

入場料：無料(講演会のみ有料)

主催：(公財)江北図書館

12/6(土)
12/7(日)

ほくら滋賀っ子「リボンむすびの宝箱」発刊記念 作者によるおはなし会 里山の小さな絵本屋さんカーサ・ルージュ

・リユース絵本プレゼント
(つなぐ絵本ライブラリー)

・今関信子先生ミニ講演&作品よみぎかせ

・『リボンむすびの宝箱』作者による朗読

滋賀のよさを伝える児童書を発行している滋賀県児童図書研究会顧問の今関信子氏のミニ講演会、作品のよみぎかせを行います。

会場住所：高島市マキノ町西浜953-17

参加費：無料 定員：25名

主催：滋賀県まるごと読書フェア事務局

12/25(木)

滋賀まるごと読書フェア～ミシガンクルーズ～

13:45
～16:00

大津港 ミシガン(琵琶湖汽船)

大津港から特別仕様で運航するミシガン船上の読書イベント

抽選で
200名
ご招待

・「しがどうわ」紙しばい

滋賀の郷土料理や方言、場所などを童話にした「しがどうわ」が紙芝居になりました。

時間：約20分

A 滋賀コレかるた大会

滋賀の魅力をつめこんだ「滋賀コレかるた」。小学生対象の「滋賀コレかるた大会」を行います。

時間：約60分

B 『成瀬は天下を取りにいく』著者 宮島未奈さんトークイベント

大津を愛する主人公・成瀬に乗ったミシガンで、彼女を生み出した宮島未奈さんのトークイベントを開催。

時間：約60分



『成瀬は天下を取りにいく』(新潮社)
『成瀬は信じた道をいく』(新潮社)

応募方法

A 滋賀コレかるた大会

滋賀県に在住または在学の4歳～小学6年生までの児童と保護者(1家族4名様まで)

定員：100名

B 宮島未奈さんトークイベント

中学生以上の滋賀県に在住、在学またはお勤めの方

定員：100名(応募1件につき1名でお申込みください)

二次元コードの応募フォームよりお申込みください。

AまたはBいずれかの枠で応募ください(両方のお申込みは無効となります)。

応募期間：10月中旬～11月16日(日)

当選発表

12月上旬にメールでお知らせします。

応募フォームは
こちら→



くわしくは公式インスタグラムをご参照ください→

BOOKS 図書館巡回展

11/6(木)
11/16(日)

わたしのまちの自費出版 滋賀

滋賀県立図書館

休館日：月曜日・火曜日

11/28(金)
12/18(木)

わたしのまちの自費出版 大津

大津市立図書館 本館

休館日：月曜日・祝日

日本自費出版文化賞の受賞作品と、滋賀県の著者、滋賀県にまつわる自費出版物を展示。滋賀県立図書館では、編集担当が会場でも本づくりの疑問にお答えします。

主催：NPO法人日本自費出版ネットワーク

11/22(土)

電子書籍を作ろう 草津市立市民交流プラザ

14:00
～16:00

電子書籍作成ツールの使い方を学び、自身の原稿で電子書籍を作成し、スマホで読んでみよう。

会場：草津市立市民交流プラザ 小会議室1
(草津市野路一丁目15-5フェリエ南草津5階)

参加費：無料

定員：20名(先着順)

対象：中学生以上の滋賀県に在住・在学・お勤め、一人でパソコン操作が可能な方

持ち物：ノートPCまたはタブレット(Wi-Fiは会場で接続できます)

※サンプルデータをご用意していますが、持参の原稿ファイル(テキストデータや画像)で制作を試すことも可能です。

主催：滋賀県まるごと読書フェア事務局



申込フォームは
こちら↓



蜂屋廃寺と法隆寺 出土した大量の瓦が語るもの

栗東市教育委員会・(公財)栗東市スポーツ協会 編
四六判並製本 総166頁 2200円(税込)

2018年に栗東市の蜂屋遺跡から見つかった大量の瓦の中には、奈良・法隆寺に葺かれていた瓦と同じ文様のものもふくまれていた。2024年開催のシンポジウムを書籍化。



70歳独居老人の京都従心案内 完全版

成田樹昭 著
B5判並製本 総248頁 1430円(税込)

「京都に最大の影響を及ぼした天下人は秀吉かも知れない」——大河ドラマ「豊臣兄弟！」予習に豊臣秀吉による京都大改造の跡をたどるガイド本にも最適。近代京都の象徴・琵琶湖疏水についても1章分を割いて紹介。



南国土佐の謎を解く 「いごっそう」と「ハチキン」の議論好き

成瀬龍夫 著
A5判並製本 総192頁 1980円(税込)
プリントオンデマンド
アマゾン・楽天ブックスでPODにて発売中
土佐人は大酒飲み？ 土佐弁には敬語がない？ 文化の源流は流刑者？ 山内家は人気がない？ ——高知県で生まれ育った著者が、ふるさとに関する素朴な疑問を解き明かす。



八十路の自由研究 小泉のタイマツ回しと全国の火振り・火回し調査

北沢尚慈 著
A4判並製本 総180頁 非売品
問合先 彦根市小泉町779(著者)

著者の住む彦根市小泉町で受け継がれる「タイマツ回し」と、北は秋田市の「火振り神事」まで12か所の火振り・火回し行事を調査。(2025.8刊)



#石田三成のつぶやき 戦国インフルエンサーの逸話と史実

ZIBU 編著／三成会議 協力
A5判並製本 総96頁 1980円(税込)

石田三成についての逸話や書状などを、Xフォロワー 22万人超の著者がツイート風に紹介する。史学博士の太田浩司氏が推薦する面白マジメなオールカラー歴史考察。



滋賀県妖怪事典

峰守ひろかず 著／久正人 イラスト
A5判並製本 総284頁 2970円(税込)
滋賀県内に伝わる妖怪を収集、計1,000体を50音順に紹介。さらに地域別(旧市町名/新市町名)、人間型や動物型、音声や地名の由来などの特徴をカテゴリごとに並べた索引も掲載。

リボンむすびの宝箱

滋賀県児童図書研究会 編著
A4判変形並製本 総184頁 1540円(税込)
滋賀県の小学5年生が経験する湖上学習船での様子を記した「うみのこ」フレンズ、唯一の有人島沖島の風景を切り取った「千円畑のひみつ」など15編を収録した童話集。



岐阜県のお城・館一覧

横山明弘 編著
A5判並製本 総192頁 2750円(税込)
滋賀県に続く岐阜県版。カラー版城館地図では、『岐阜県中世館総合調査報告書』以外にも新たにわかった城を多数掲載。著者が参考文献等で調べた城館や城主、築城・廃城年も収録。巻末索引付の便利な一冊。



表紙写真 中江藤樹・たかしまミュージアム展示室

編集後記 鴨稻荷山古墳出土の金銅製「冠」と飾履の装飾について、少し解説。紫紺色の球体はガラス玉、白いふさは絹糸を束ねた菊綴飾りというものだそうです。飾履は足の裏の面にも装飾が施され、実用性はありません。展示では、裏面が見えるように、飾履の下に鏡が置かれています。もう一つの、金製垂飾付耳飾は、純金製なのでほとんど劣化しない状態で発見されました。所蔵している東京国立博物館で、関連の特別展があると展示されます。㊦

アンケートのお願い

Duet をより良い情報誌にしていけるために、ぜひ皆さまの率直なご意見・ご感想をお聞かせください。



インターネットでDuetがお楽しみいただけます

<http://www.sunrise-pub.co.jp/>

